

山の作家宇江敏勝の近著『狸の腹鼓』を読んだ。

著者は1937年、熊野の山中で炭焼きを業とする家に生まれた、原木を求めて山から山へ転々と移る幼少期だった。熊野高校卒業後も、炭焼の仕事が続けた。木炭産業が不況になると植林・下草刈りなどの造林の仕事に従事し、山をホームグラウンドとする生活を続けた。

山仕事のかたわら、山人の仕事、山小屋の暮らし、身近にいる動物など四季の生活を題材に文章を書き、『山びとの記』や『山に棲むなり』を著わした。

『狸の腹鼓』は、1960年代に熊野の山中で炭を焼いていた著者と思しき主人公が、霜月祭の当日かつて炭焼をしていた日置川源流の集落（田辺市下川上）を車で訪れた。昔の仲間はずでになく、今浦島の気分。木馬道だった林道を登り、崩れ落ちた窯と小屋の跡を見つめる。突然60年前の景色と少女のおもかげが浮かびあがる……。自伝的な恋愛物語。

初冬のある日、文通していた高校後輩の少女が炭焼小屋に訪ねてくる。家庭の事情に悩み、話を聞いてもらいたくて来たという。囲炉裏をはさんで二人は一晚語りあう。少女の悩み、生い立ち、読んでいる本、将来のことなど山の暮らしのことなどを話し合った。小屋に近寄る動物たちの話が少女を喜ばせた。

猪や鹿にも出会う。兎は罨で獲って食う。狸は夜になると小屋に近寄ってきて、捨てたご飯粒や魚のアラを食う。

「狸なんて、いつペン見たいわ」

「今晚は見られるかも知れんよ」

夜が更け、近くの木が揺れ、冷たい風が隙間から入る。枯れ木が屋根に落ちる音。

「ほら、狸が来とるよ。ブン…ブン…ブンというとるやろ」

「ええ、たしか聞こえるわ」

「狸が鼻で息を吹いて、落ち葉の下にいる虫けらを探す音が静かな林に響くんや。ポンポ」
ポンと腹を叩いて踊るといふ狸の腹鼓はこのことなんだ」

「炭焼は本当のことを知っているのね」

「朝まで起きていようか」

「好きな男の人がいるんです。そのことも聞いてもらおうと思って…」